法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

えにし

遠藤, 寛子 / ENDO, Hiroko

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
76
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
63
(終了ページ / End Page)
66
(発行年 / Year)
2009-03-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003902

【紹　介】

え　に　し

遠　藤　寛　子

アン＝ヘリング教授がめでたく定年を迎えられると伺った。

ヘリング教授はいつまでも法政大学教授として活躍されるように思っていたが，歳月はいつのまにか流れ去っていたのだ。

御在任中の輝かしい業績については，学内外の諸先生が語られよう。私はヘリング教授のお人柄をあらわすいくつかの思い出をつづらせていただく。

ヘリング女史にはじめてお会いしたのは，もう四十年近い昔になる。児童文学の何かの会合で,「あなた　法政出身ですってね」と，ヘリング女史独特の明るく親しみをこめた口調で声をかけて下さった。

それまで，江戸～現代の児童文化研究家としての，アン＝ヘリング女史の令名は夙に，存じあげていたけれど，まぶしくて私など近づきがたい存在だった。

それが，法政出身者を大切にして下さる女史のお心づかいで，私は急速に女史に親しくさせていただくことになった。

すてきな出会いもあった。教師時代の私が，ある年の冬休み，いつものヨーロッパ旅行からの帰途，その時はアンカレジ経由（その頃はこれが通常コースだった）の切符がとれなくて，やむなくニューヨークをまわって帰ったのだが，全くの偶然で，NY～成田間女史と同じ便に乗り合わせるこ

とになった。女史もおくにのヤキマから日本へ帰任の旅で，シアトル経由便がとれなくての事だった。

私達はこの不運（というのは大げさだが）が呼んだ幸運を喜びあい女史の隣席があいていたのを幸い，並んですわって成田まで，ほとんど話しどおしだったと思う。

楽しい会話の中で，私は実に多くのことを学ばせていただいた。

組みあげ絵のこと，おもちゃ絵のこと，ちりめん本のことetc――この時に限らず，女史は私達日本人が蒐集を怠っている間に反故として捨て去られかけたそれらを情熱をこめて集め，研究され，その成果を，さらなる情熱を以て語って下さるのだった。

女史の熱意はご自身の研究にむけてだけのものでなかった。友人の或いは教え子の，研究に対しても協力を惜しまれなかったが，それは私の上にも及んだ。

私は少年少女向けの歴史小説を書くことを主な仕事としているが，その中で三十年ほど前，江戸時代の和算書「算法少女」に材をとり，同名の作品を書きあげた。しかし，当時はコピー機も未発達で，稀覯本のこの本を調べるのにかなり苦労した。すると，女史はご自身の古書探究ネットワークを動員されて，とうとう明治時代の書写本「算法少女」を入手して，私に届けて下さった。これは原本とは別の意味で貴重なものであり，おかげで私の作品は充実したものになった。完成当時サンケイ児童出版文化賞を受賞，さらに原版の版元が顧みなくなってからも，数学関係者の支援をうけ，ついに二〇〇六年には，ちくま学芸文庫から新しい版が出版された。これは予想を超える反響を得て，作者の私を驚かせたが，これも，女史からの書写本の力があずかって大きい。

私が海外のどこかへ旅する計画を，女史にお話すると，女史はその地の友人知己を御紹介下さり，そうした方（かた）がいられないと，とても残念がられて，私の方が恐縮するのだった。

ウィーン大学日本学研究所にリンハルト教授をお訪ねした時は，L.教授

御自身で附属図書館を案内して下さり，あとでコーヒーを頂きながら，多くの滋味あるお話―L.教授が皇学館大学で講演なさった内容などを話して下さり，思わず時間をすごしてしまった。

それで予定をちょっと変えて，シェーンブルン宮をいそいでのぞいて帰ったが，添乗員さんは私のその日の日程に興味をもっていて，「どうでした」と訊いた。かくかくしかじかと話すと，彼女は即座に「シェーンブルンなんかいつでも見られます。ウィーン大教授とコーヒー飲みながらゆっくりお話しするなんてそうそう簡単にできることではありませんよ」といった。私は改めてウィーン大学教授の彼地における社会的地位の高さを認識すると共に（ヘリング女史自身も同大客員教授でいられたが），ヘリング女史の御紹介があっての故の，L.教授の温かいおもてなしと思うと女史の人脈のすごさと，それを私のために惜しみなく使って下さったことへの感動で胸があつくなった。

女史の御好意で忘れがたいことがもう一つある。私の母の死去の時，女史は心のこもった慰めのおことばや御供花等と共に，私がその時最も必要とした，信頼のおける人手として，彼女の有能なアシスタント，Aさんと，Tさんをさしむけて下さった。女史自身非常にお忙しい時であったのに。

女史から賜わった学恩，個人的な御好意はほんとうに数えるときりがないほどだが，それらを考える時，私は古風だけれど“えにし”というものに行きついてしまう。

これはずっと後になってわかった事だが，女史と私には，法政大学というきづなの他にもう一つの結び目があったのだ。私の敬愛してやまぬ昭和の名編集者，内山基氏と，ヘリング女史はその若き日の留学生として来日の折，令嬢美樹子氏（現早稲田大学教授）を通じて，家族的な親交があったというのだ。

ヘリング女史御自身「人生は，小説よりも不思議なもの」と感想を述べられたが，私もこの御縁のふかさにただ驚くのみである。さて女史が大学を離れられても，ますます活躍されることと期待するものだが，それにつ

いていくつか気がかりの点を申しあげたい。

女史は決して健康に恵まれたタフな方ではない，どうぞ御無理をなさいませんように。

そして最後にもう一つ。これまで女史は原稿に完璧主義を貫こうとされる余り，〆切をあまり年頭におかれぬ事があった。完璧主義はとても立派な事だが，一方編集関係者にとって，〆切は極めて重大な問題である。実は数年前私自身小著のために女史の見事な文章を頂いたが，それを頂く迄に胃が痛くなる思いをした。これから多くの原稿依頼が来ると思うけれど，どうぞうまく両方の折合をつけられて，諸紙・誌を玉稿で飾られることを切に祈るものである。

ヘリング先生，新らしいスタートお祝い申しあげます。いつまでもお元気で，よいお仕事を！